

と奏上に及んだとかいふ將軍の墓もあるさうな、雄略天皇が新羅征伐を思ひ立てた時の事ちや、例の竹内宿禰の子孫とやらいふ小弓の宿禰といふのが、小臣大將軍を承りませうが、近頃妻を喪ふたで寂うしてかなひませぬ、出征中も何うも女が無うてはナアと畏れ多くも奏上に及んだ、雄略帝と申される方は猪を蹴殺したの何のと強い評判ばかりあるが、實は却々御心優しい方に在りました事は、萬葉集の開卷第一に野遊びにいでました折摘草をして居つた賤の乙女に「此岳爾菜採須兒御前の家は何處か名は何と申す」と御言葉を賜ふたとあるによつても推し奉るに足るのちやが斯やうに物のあはれを知らせ給ふ御方ちやによつて小弓宿禰の心中を御察ありて「天皇聞悲類歎以吉備上道采女大海賜於紀小弓宿禰爲隨身視養遂推殺以遣」と日本紀にもありさうな、戦争に妻女を伴ふといふては露西亞の將校のやうちやが新婚旅行に戦争に出掛けると云へば勇ましようも聽へる所が此の新婚戦争で宿禰は

病歿して仕舞つたで、新婦は遺骸を携へて日本へ歸つて「作家墓田身輪邑而葬之」とある、其の田身輪は此の淡の輪の事ちや、其の墓も其の妻女の墓も此地にある筈ちやが、何の土饅頭が夫れやら一向解らなんだ。ズツ後の天正年間の話ちやが、此地の淡輪大和守徹齋の女は小督といつて關白秀次公の妾ちやつたが、秀次公滅亡の時此の妾も三條河原で斬られた其辭世を見なされ、  
「生れ来てまた歸ること道なれや雲の往來のいともかしこし」  
縁首を延べて白刃を待ちながら花顔微笑を湛へ「雲の往來のいともかしこし」と泰然自若たりちや、聖賢の大徹底も之に一分を増さず之より一分を減せざる底の妙諦を道破し體現いたしたものでちや、泰山前に崩るゝも何んちやとか彼んちやとか素人をつかまへると豪ら相に申たがる禪坊主などに此の妾の眞似事でも出来るものがあらうか、什麼生ちや昔は人の妾でも斯やうなものちや、當今の大臣宰相輩の妾如き

は歌と云つては都々逸一つ詠める事ではあるまい首でも斬られると  
なつたら亭主の頸玉にしがみ附いてキーク喚いて手に終へたもの  
ちや無からう人間は進歩したと申すが女といふものは甚う退歩した  
ものちや兎に角この女一人の爲にも此の淡の輪といふ土地は忘れて  
はならぬ所ちや斯やうな土地に怪しげの女を連れて参つてゴロ／＼  
寝轉んで居るのは其烈女に對しても相済まぬ儀ぢやらうかと淡の輪  
から深日に参る船の中で兀然と坐りながら山僧は考へた事ぢや。

(十一)

淡の輪と深日の間は黒崎の松原などといふ土佐日記時代からの名  
所もあり長松の濱などいふ松原が打ち續いて船でのろり／＼と其岸  
邊を漕がせて参ると誠に長閑な美しい眺めぢや深日から揚つて例の  
融通行脚の人力車で加太へ向ふた谷山を過ぎて山道にかゝるとモウ  
融通が利かなくなつて眞實の行脚ぢや山を降りて波打際の絶壁を削

つた細い道を参ると小島といふ一寸風情のある漁村がある此處から  
一二町参ると和泉と紀州の國境ぢや道端に太い木標が立つて居る文  
字が消えて唯の棒杭ぢや其下に昔の人が立てた石標があるで差支  
ない車夫は此國境に空車を置いて荷物を擔いで供をせうといふ和泉  
の國の車夫ぢやに依つて紀伊國に車を曳き入れぬといふ心懸が殊勝  
ぢやと思ふたら何の懸て時にかかるで空車も通はぬからぢや。  
紀伊國太川村ぢや法然上人自作の分身の像とやらがある何とか申  
す寺があるさきの小島も此太川も小綺麗な物閑な漁村で海も清う波  
も穏かで四方の眺めも捨て難い風情のあるところは山僧のやうに海  
ぢやとて山ぢやとてギシ／＼と綱を詰めたやうにガチャ／＼と稻田  
に雀の寄つたやうに人の群れて居る所を蟲の好かぬものには誠に氣  
に入り申した總じて山僧どものやうに人怯のする人間は舞子や濱寺  
などよりも斯やうな鄙びた土地を選んで避暑に乗ねて避人を致すが

精神にも身體にも懐にも大の薬ぢや、避くべきものは暑さよりも寒さよりも先づ人間ぢや、暑さ寒さは水や炭團でも防げる、ソナ物では防げぬ人間の方が厄介なのぢや。

激邊の石ころ道が果てると時ぢや、見上げた處二十町もあらうか、下から上まで、岩角の出た胸を突く峻坂ぢや、時は正に真晝中の十二時ぢや、哩、キラ／＼と焰を吐くやうな太陽を腦天に受けて其焼けたやうな岩角を攀ち上つたものぢや、壯絶快絶を通り過ぎて氣絶しさうぢや、暑サも斯う残酷に威勢を振ふと人間ほど面の憎いものぢや、之が暑サぢやから耐へて呉れるが人間ぢやつたら革命ぢや。

上衣を脱ぎ洋袴をぬぎ何時の間にもやら禪一つの赤裸になり申した、之に眉深のヘルメット帽を被つた形は希臘の勇士といふものぢや、想ふ昔、テルモビリーの險に據り六千の希臘兵を以て三十萬の波斯の大軍を防いだといふスバルター王レオニダスを畫で見ると頓とコンナ

形ぢや、頃も丁度七月ぢや、テルモビリーも此時ほど暑かつたに違ひない、裸のレオニダスが雲霞の如き波斯兵を相手に赫々たる炎天の下に大汗を流して苦戦奮闘し、遂に恨みを飲んで戦場の露と消えた事を想へば、此のレオニダスも暑い位に屁古垂れてなる事か、とエイ／＼聲で上つて呉れた勇ましかりける事どもちや、が此のテルモビリーがモウ十町も高かつたら、あはれ先祖のレオニダスと同じ運命を脱れなかつたに相違ない、絶頂に着いた時はへ／＼ちや、舊道を參ると松の小蔭があつたによつて、レオニダスも兜を脱いで海風に涼を入れた。

頭の上の山にも脚下の山又山にも其處彼處に砲臺がある、深山要塞といふのがこれぢや、山の下は直ぐ紀淡海峡ぢや、希臘兵に逐ひまくられて波斯兵が二十萬もボカ／＼落ち込んで死んだといふ海はこれぢや、蝙蝠が羽根を張つたやうなのは沖の島地の島神島、總稱して苦ヶ島といふ島で、神功皇后が流れついて産後の悩みを癒されたといふ島ぢ

や沖の島には砲臺がある向ふの淡路の由良にも要塞がある如何な強  
い波斯兵にも此のテルモビリーは打ち破られる事ではない。  
深山の峠を下りて深山要塞砲兵の營所の前から十五町ほど参ると  
加太ちや今日は先づ此處で泊りちや。

(十二)

加太は紀州の出端で海山の眺めも悪うは無いが如何にも風の乏し  
いところちや海に向ふた宿の二階さへ足しない風が折々惜し相に吹  
いて来るばかりちや暑い所ちやのうと婢に申すと其の代り冬中は豪  
い風だすと別だん不足の顔も爲なんだ此地の人は冬の間は涼み貯を  
致してもあらうが他の土地から参つたものは左様の用意もないによ  
つて一しは暑い事ちや。

宿の向ひの淡島神社に詣る神功皇后が忍熊王の謀反を避け給はん  
爲め何んでも此邊の海を渡られた事がある其の折暴風に逢ふたが此

神の冥護によつて無事に苦ヶ島に漂着された上に産後の御惱みも治  
まつたとある其後仁徳天皇淡路に御幸の折苦ヶ島から此の地に神靈  
を遷し奉つて神功皇后をも合祀されたとあれば随分古い社ちや其因  
縁によつて海上の守護神子授けの神安産の神今一つは縁結びの神即  
ち水難救済事業と婦人科醫者と結婚媒介業を兼ねられる其のうちで  
結婚媒介が一番御多忙ちやさうな太古は人間其の間に左様の事業も  
乏しかつたによつて神様が遊ばされた今日では大方人間が仕る結婚  
の媒介などは基督教徒共が盛んに仕るちやによつてモウ神様を煩はし  
奉る事は一切遠慮致して然るべきちや然るに此の頃は結婚の儀式ま  
で神前や佛前で行ふ事が流行るこれは斯の道に於て人間の信用が無  
くなつたで神様や佛様を保護神や保證神に御頼みする譯ちやらう。  
日が暮れた宿の直ぐ下の防波堤の上に一つ二つ三つと次第に夥し  
い提灯の灯が集つた懸がて女の聲で其處から是所からも何さーん誰

さーんと呼ぶ沖の方からかすかに「オーイ、オーイ」と男の聲で應ずる。月は牙えて海は蒼い、細い高い女の聲と太い低い男の聲が送に蒼い海を渡つて月に溶け込やうに消える欄に倚つて恍然と聴き惚れて居ると、漁夫の唄が亭主の舟を迎へに來たのだと宿の婢が言ふた次第に「オーイ、オーイ」といふ男の聲の近なるにつれて「誰さーん」「何さーん」の女の聲が生々と活氣を帯びて來る。月の光に互の姿が微かに見えるやうになると「誰さーん」「オーイ」「何さーん」「オーイ」が愈盛になる。無數の小舟が堤防の下に寄つて來る。「何さん」「オーイ」の聲のうちに提灯はバラ／＼と波灯際に下りて、彼の舟此舟に散らばると、其處も此處も樂し相な嬉し相な話聲笑ひ聲でさいめき渡る。「何さーん」と外の亭主の名を呼んで「オーイ」と答へさせて己が亭主に水をかけられる唄もある。「誰さーん」と外の亭主を呼ぶ聲に「オーイ」と答へて己が唄に打たれる亭主もある。魚籠を渡しかける亭主を「何さーん」と高く呼んで「オーイ」と云はねば受取らぬと

身體を震へてゐるのは、若さうな唄ぢや、千狀萬態ぢやが要するにあらゆる大人の「嬉しさ」のうちで、今此濱邊に湧いて居る「嬉しさ」ほど自然にして邪氣のない「嬉しさ」は、あるまいと思はれる。光景ぢや、虚飾虚榮の衣服に蒸されてゐる都會の「嬉しさ」も、折々斯様な濱邊に參つて裸體になつて海水浴でも致すが好からう。

(十三)

加太から和歌山に參る昔の街道は二里ヶ濱と唱へて、二里餘りの間青松白砂の松原續きぢやが、今は田圃中に街道が出來て、件の松原は閑却されて仕舞うた山僧は態と遠道を致して、其の松原を歩んだ。老松の梢の繁みに夏の日も通らず吹く風も得らぬ香を有つて、何とも心地のよい事ぢや、斯やうな松原の二里餘りも續くは、類の鮮ない勝地ぢやない。よつて昔の人が態々此處に道をつけた、夫れを捨て、何の風情もない田圃中に道を作るといふは、恐劣な話ぢや、少々遠うても、少々高低があつ

ても斯やうに美しい天然物の賜を活用せぬといふ法はない和歌の浦には名所が御座るなご、月並の名所ばかり自慢して斯ういふ勝地を棄て、願みぬとは朝毛吉氣の知れぬ人達ぢや。

松原を出で紀の川の北島橋を渡ると和歌山市ぢや、天主閣に上れば一目要領を得ると聴かされて居たので、取敢ず車を城内公園に走らせて件<sup>くだん</sup>の天主閣に上つたが、成程大方要領を得たやうな氣が致した直ぐと紀三井寺から和歌の浦へ廻つて望海樓に落附いた事ぢや。

さて此和歌の浦の事は、委しう記した案内書も數あるに依つて、一切夫に譲つて山僧は此處の二階から一わたりぐるりと見廻して事済みと致さう、これも融通念佛の類ぢやと、今買うた繪はがきと引合せて直ぐ後の岩山は玉津島山、夫れ其處が不老橋、其向ふは片男波、夫れから和歌の松原、其の果が出島、其先の高い處が雜賀の崎と、大方要領を得て仕舞うた和歌浦一帯を山僧の遺産の心得で委しくは案内書に譲る事

と致した。

斯やうに財産を他に呉れて仕舞ふと俄にズント氣輕身輕になつて一風呂浴びて縁先に胡座をかいて海風に吹かれて居る心地は又なく長閑ぢや、之を想うても要らぬ餘財などは身につけずに一貧湯上りの如き境遇に居るが安樂長命の基ぢやと合點が參らう。

夜に入ると全他に譲つた不動産一帯に盛んなイルミネーションぢや、濱寺といひ此處といひ濱邊の松原にイルミネーションは紀泉地方の好みと見える濱邊の松原に所々蒼白いアーク燈の輝いて居るのは一寸風情もあるが、イルミネーションとやら下女が烏瓜の陰乾をやつて居るやうなものを引張り廻すのは何ぼう雅致のないことぢや、がモウ他に呉れて仕舞うた土地ぢや、何うでも構ひ申さぬ。

折から訪ねられた佐藤法學士に、唆されて其の烏瓜の陰乾の下を潜り廻りながら濱邊を彷徨うた、茶番や相模の餘興もあつて、夥しい人出

ちや和歌の浦に人みち来れば片なしちや和歌の浦やら千日前から判じがつかぬ名所々々が何れも斯様に繁昌するは結構千萬ちやが新しい設備をするものに今少し風雅の心得があつて欲しい濁熱汚穢の都會の空気を避けて清涼爽快の海山の空気を吹はうと思つて来て見れば其處も亦田舎臭い千日前では助からぬ大阪の火事を逃げて江州の地震に出會したやうなものちや。

大俗不風流なる碧眼紅毛の輩さへ其の國の名勝の保存には金銀を離れて骨を折つて居る然も何れも天然の風致を損はぬやうに雄大は益雄大に幽邃は益幽邃に風雅は益風雅にするやうに心懸けて居ると聞いた風雅を命の日本人が大俗不風流の紅毛人に敗けをこころは残念ぢや尤も彼方でもナイヤガラナイヤガラの瀑布を五色のサートライトで照すといふやうな阿呆らしい悪戯をして居るさうだが之も畢竟雄大を愈雄大ならしめんとするに失したので奈良大佛の面に紅隈を描いたやう

なものちやが烏瓜の陰乾のやうなケチな知慧しか持ち合せのないに比べれば規模の宏大なだけでも大分増しちや。

(十四)

今日は西國第一の粉河の觀音やら太閤記で御馴染の根來寺やらへ參らうと思つて遂我れ知らず河南線の汽車に乗つたヤレ仕舞うた行脚の僧に一時間何十哩と急がにやならぬ用向のある筈もないに斯やうな鐵の道を敷いた上を鐵の車輪を走らせるやうな大業な仕掛けの車などに乗るとは何事ぞゆるり〜と參つて一向差支ない山僧を乗せて紀の川ペリをゴロ〜とヒタ走りに走つて居る汽車こそ氣の毒なものちやと思つたが聴けば開化した汽車は一時間に五六十哩速いのは百哩近くも走るものちやといふに日本の汽車は三十哩内外が關の山南海鐵道などは二十哩も登束ない此河南鐵道に至つては十三四哩とは情ない壁でも夕立に遭へば今少し速く走るぢやらうシテ見れ

ば山僧の行脚と五十歩百歩と申すものぢや斯やうなノロ／＼な汽車があるに何も人間の足でノロ／＼と歩くにも及ばぬ事ぢや以來行脚は斯やうな汽車で致すが好いと思ふた。

粉河町に降りた紀の川に沿うた一寸繁昌な町ぢや停車場から寺まで六町が間の町幅は大坂の心齋橋筋に敗ける事ではない店構も却々気がきいて居る今日は福引の催しで町々提灯など引廻して景氣のよいことぢや寺に詣つて本堂に賣つて居た粉河寺縁起靈驗記といふ本を見るに紀州粉河寺は光仁帝實徳元年にたつわがてうの補陀洛淨土なりと大士みづからとなへ靈神またこのよしをつげ給へりたづぬるにふだらく淨土はほんぶゆくことかたしゑかるに大慈のあまりこのくに淨土をうつしてひろく利生をほごしおはしまさんとにや慈眼この地を見そなはしまつ無謀の力用をはこび池をうがちて南の海をかたどり島をきづきて孤絶山をうつし給ひてけりとある左様な靈

場と心得て然るべきぢやが其海をかたどり孤絶山をうつしたといふ觀音大士の大工事を見ると茶室の庭ほどのところに可愛らしい池があつて握拳ほどの島がある。

池の傍の堂の軒に眼光爛々として熊坂長範を欺くやうな面の木彫の獸が居る體の長さは尾まで四五尺もあらうが面は件の如く盜賊やら猛獸やら一寸判じ難ねるが首を揚げ四足を屈して此方を睨んで居る姿勢といひ骨格といひ生氣躍々として今にも欄間を飛び下りて掴みかゝりさうぢや天晴名作をやくたいもないところに載せたものぢやと眺めて居ると傍から車夫が昔紀州侯が將軍家から拜領になつた左甚五郎の虎はそれぢやといふ日光の眠り猫は話のえらい程には感服もせなんだが此處の虎は氣に入つた面は猫をモデルにしたらしいが顔中を眼のやうにして大盜賊の睨んだやうに眉を上げた工合は眞物の虎を離れた所に恐ろしい所がある。



縁があつたら又逢はうと其虎に挨拶致して今度は例の根來寺ちや  
岩手まで汽車行脚で夫れから一里半ちや高野山金剛峰寺に續いての  
眞言宗の巨剎で昔は山に瀾り谷に跨り伽藍増坊が二千七百餘もあつ  
たが今では五つ六つもあらうか見渡せば蒼々たる山の間にチラリホ  
ラリと堂宇の屋根が見えるばかりぢや。

元龜天正の昔此處の坊主共は唐瓜頭に捻鉢巻で衣の下に肉を着て  
大暴れに暴れて信長秀吉の天下を惱ましたが終う／＼秀吉の肝癪玉  
で滅茶々に焼き盡されて仕舞うた宗教家の癖に戦争や掠奪をやる  
は好ろしくないか賄賂を取つて縛られるから見れば堂々たるものぢ  
や。

豪う大きい山門が残つて居る夫れを入ると昔の僧坊の跡が礎も止  
めず青々とした田畑になつて居る保護建造物の大塔上人入定の窟な  
ごを見巡る至るところ物靜かにうら寂しいのが氣に入り申した櫻の

古木の多い事關西に稀らしい春は嘸ぢやが櫻に心あらば咲くも憂し  
咲かぬもつらしと唧つちやらう行けど行けど高い所も低い所も何れ  
夏草や妨主共の夢の跡ならざるはなし國亡びて山河在りなご月並の  
幽情を催しながら鬱々蒼々たる樹蔭をさまよへば型の如く颯々たる  
松籟古を語つて咽ぶが如しぢや。

(十五)

根來から岩手に下ると丁度日が暮れた今日は粉河を泊りのつもり  
ぢやつたか謠曲の粉河寺を其まゝ一年に二夜は旅人に御宿參らせぬ大  
法にて候御宿はかなひ候ふまじと目を据ゑて章魚のやうな口をして  
唸り出されるを返す／＼も御いたはしさの餘りにかやうに思ひより  
て候ふと梅夜叉に附文をされる見込のない山僧ゆる何う魔誤つかう  
も知れずと再び和歌山へ逆行脚を致して和歌の浦に泊つた。  
旅の衣の日もそひてなご折々本山の老和尚達が締め殺されさう

な聲で唸るのを拜聴に及ぶと坐ろに欠伸を噛み殺す事で御座るが、自身其の文句を實行致しても却々退屈なものぢや、急ぎ候はごになど、のろり／＼二年も三年も歩き廻つた昔の人達の根氣の好いには山僧は今更ながら感服致す感服した事は必ず其通りに實行致すといふのはやはり昔の人のことで今では感服は感服實行は實行と判然區別するが法ぢや、で山僧も一先づ行脚を切り上げやうと思ふた。

和歌山を引揚げやうと思ふてふと思ひ出したのは腹巻の事ぢや、山僧は赤子の時に腹の病を患んでから今に至るまで凡そ風呂に入る時の外腹巻を肌から離した事がない、然るに其腹巻は綿フランネルぢや、綿フランネルは即ち所謂紀州ネルぢや、紀州ネルの本場は此和歌山ぢや、山僧の莫逆の腹巻の出身地と思へば懐しい土地で御座る、イデ其腹巻の出来る所を一見致さうと存じて第一綿ネル會社とやらに參つた。藝は道によつて賢しぢや、社長殿に會うて苦心談を聴くと腹巻一本

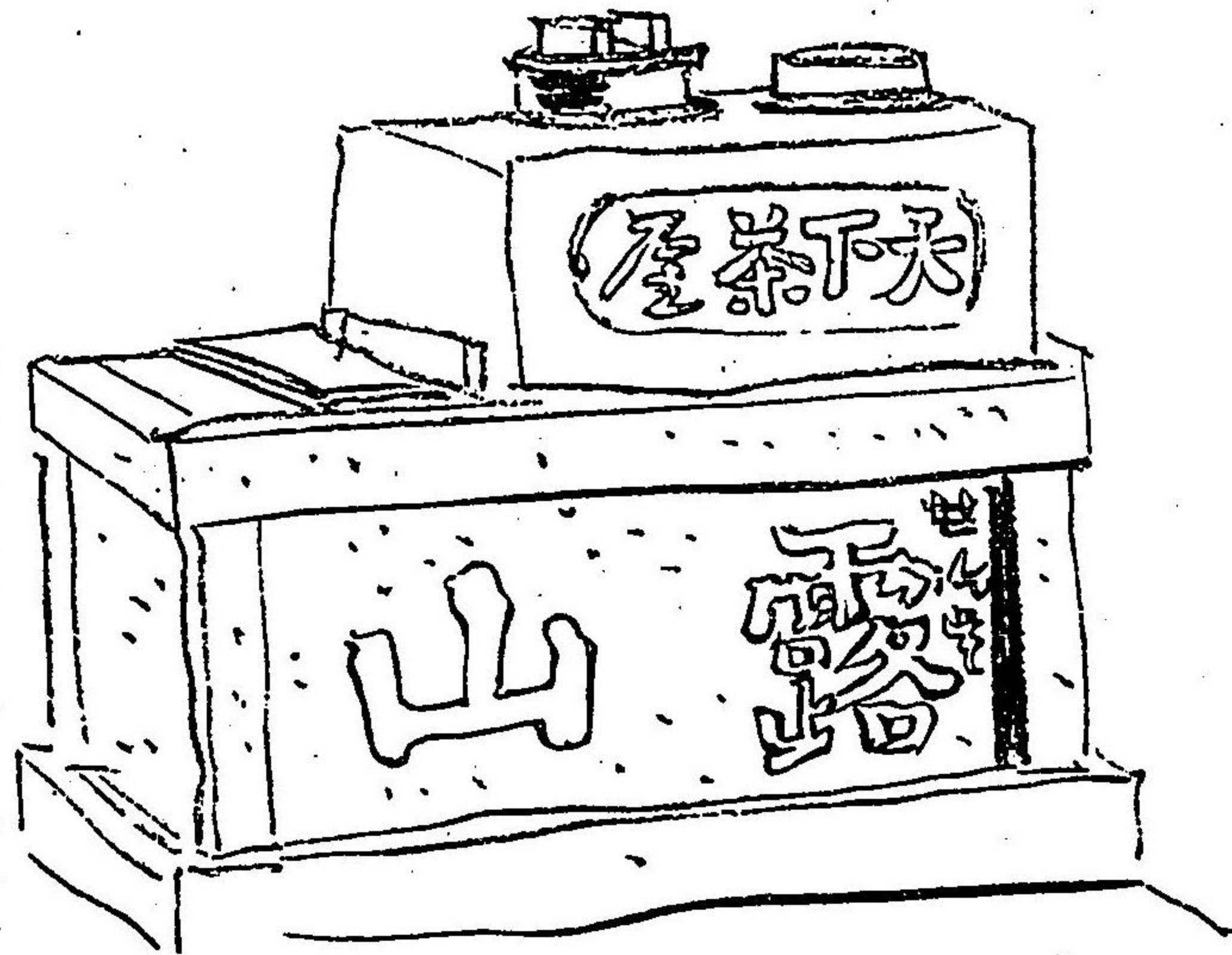
出来すにも永い月日や様々の辛酸を経たものぢや、而して天然の力と人間の力が合致いたして成るものぢやと悟つた工場を見せて貰うたが帆木綿のやうな布が見る間に毛織のやうになる、夫を大きい機械の端の方に入れる向ふの端から綺麗な腹巻に染め上つて出て来る、夫が一本あつたら山僧の一生ではとても巻ききれぬ哩。

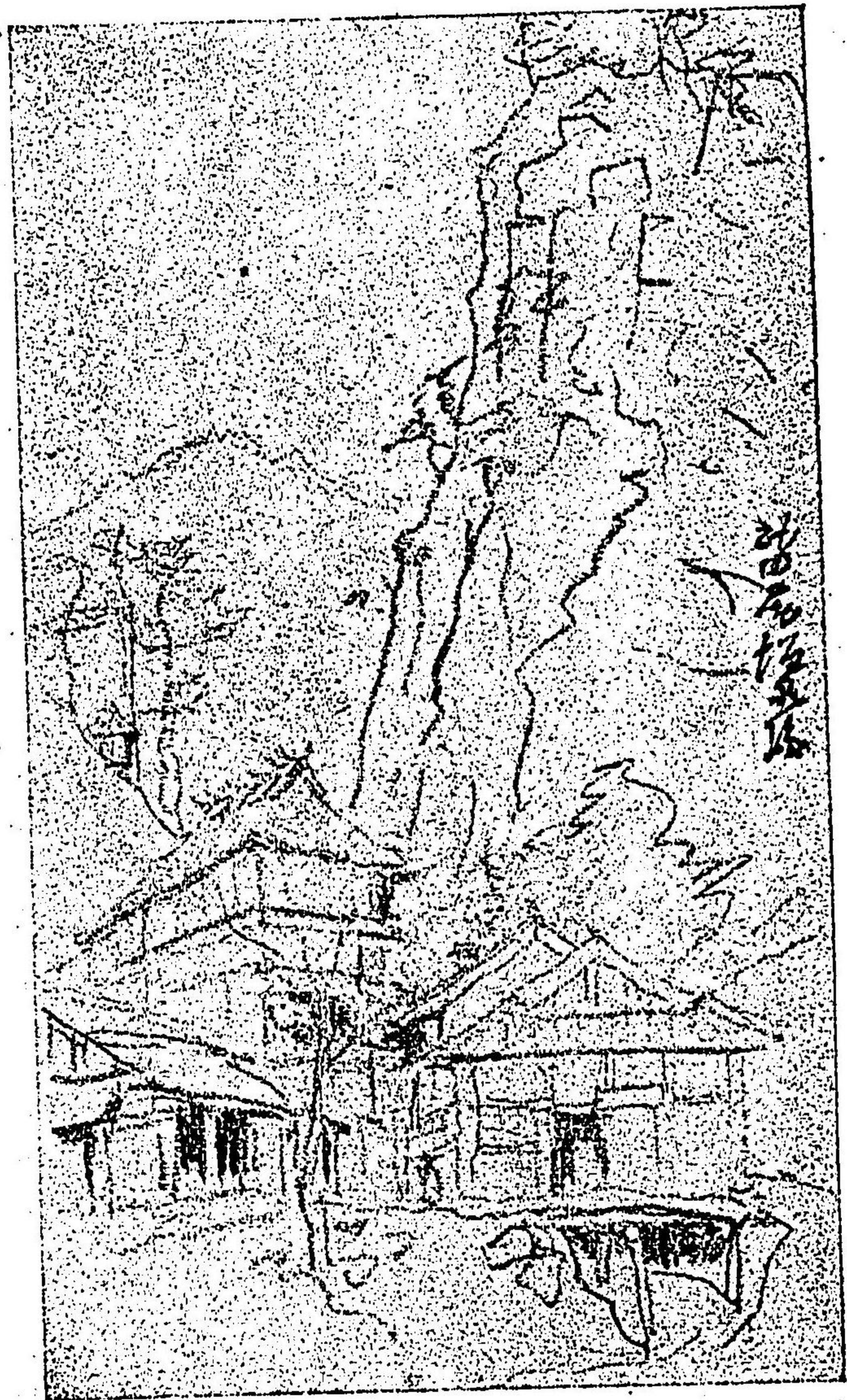
山僧は何處を行脚致しても懸應と遊廓は大方目をねむつて素通りを致す慣ひぢやが此處の懸應には日本にも西洋にも一寸類のない珍警務長が居られると承つたで門前を通りがてらに推參に及んだ成程珍警務長ぢや、リニューマチで身體中が固うなつて坐つたら坐つた立つたら立つたで其身體を動かすには先の綿ネル事業と同じく永い月日と様々の辛酸を経のぢや、一つの椅子から隣の椅子に來るに先づ尻が椅子を離れ切るのが三分間立ち上るまでが二分間次の椅子まで來るが三分間其椅子に尻がつくまでが三分間其尻の全く落ちつくまでが二

分間總計十二分間といふ勘定ぢや従つて之でスワ鎌倉といへば佩劍  
 受々馬を驅つて飛び出さねばならぬ職掌の警務長が能く勤まつたも  
 のぢやなごゝ俗物どもはいふて居るさうぢやが蝗のやうにヒヨコ〜  
 御辭儀をして蟋蟀のやうにヒヨコ〜飛び廻る天下の役人どものうち  
 に一つ頭を下げるに三十五分もかゝると申すやうな泰然たる人格が  
 わらうとは此の山僧も今の今まで知らなんだ況して泰然たる事は自  
 然主義の何のと八ヶ間敷云ひよるが生きた人間には少しは融通をつ  
 けて置いてやらんぢやなますまいソイでめい〜が悪うなつたら  
 自業自得ぢやナカ此縣は遊廓のない代り何か融通の道があるに相違  
 あんませんが其んな邊まで警察が世話を焼く事は出来ません衛生  
 もあまり干渉しまつせん悪い病に罹るが嫌ならめい〜で氣を付け  
 るがヨカと悠々追らす右の掌をあげて頬に止まつた蚊を打つぢや  
 が其の掌が途中を行脚を致して居る間に蚊の方は澤山御馳走を頂戴

して夙に逃げて居るにも  
 かまはず時計の動く位に  
 肉眼ではわからぬ位の速  
 度で掌を頬に持つて行く  
 のでも解る。  
 行脚十日打ち止めには何  
 か珍なものが欲しい孔子  
 も春秋の筆を獲麟に絶つ  
 た山僧も此の珍務長を得  
 て泉州行脚の筆を擱く。

—(四十二年七月)—

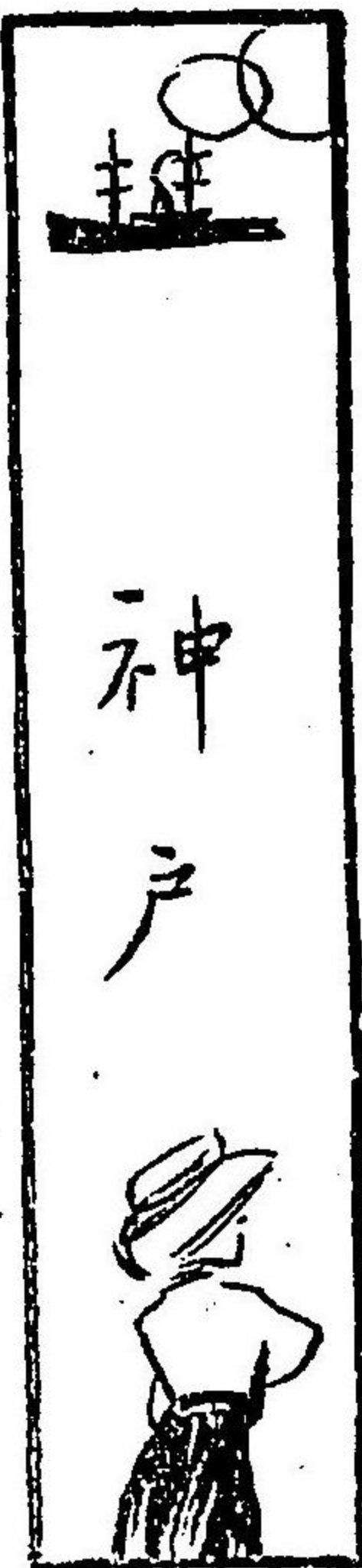




山崎屋敷



山崎屋敷



神戸

上田敏

香港から一直線に日本を指して来ること数日、右舷の沖合に低く種子が島が浮ぶ、それからのはじめで大隅のはなを見ると、かんくした熱帯の風景に疲れた眼を新たに悦ばす青々とした岬の山を迎へる。さあそれから程やかな懐しい國へ歸臥するのだと、一安心するので、土佐沖はぐつすり寝込んで了ひ、紀淡海峡も夢の中に過ぎ、終に船脚の變化に眼が覺めて甲板へ出て見ると、船はいつか頗る閑静な港へかゝつてゐる。輪廓の柔らかな低い山々が海に差掛つた、其裾にちよこなんとして行儀よく木造の小屋が居並ぶところは、まるで大きな箱庭を見る如く、寂しい水の上を外國風の帆船が通つて行くのも、却つて風景に一段の

悠然たる趣を加へる。小さな倉庫やうの建築も見えるがまさかこれが日本一の開港場ではあるまい。傳へ聞く浦とでもいふ可き古跡だらうと思つてゐると、船はやゝ進んで終に投錨する。さてはと驚いて、つらつら陸上を眺めると、今波を蹴つて近づいて来る小蒸汽船の方向に、フラフを立てた四角の建物がある。ホテルらしい波止場の側に所謂西洋造の低い小屋がみえる。多分税關だらう。空の色水の面を除いて考へてみると、建築の様子に何となく、ポルトサイドの俤があつて、生れの國へ歸つて来たとは思はれなかつたのが、はじめて神戸を見た時の印象である。

三宮停車場へ波止場から一直線に歩いて寂しい商館通支那街の一角。それに見慣れた日本の町家並が眼に忸んで来ると、成程やはり明治の日本だと承知は出来たが、唯閑静な小都會を通つてゐると思つたばかり、これといふ新らしい興も起らなかつた。汽車の窓から全市の展望

を試みたが、青山白水の影が眼に映つるのみで、色彩鈍く輪廓雜然たる市街には氣がのらなかつた。日本は人工よりも天然の美を味ふ可き國かと氣が付いたが、窓前に動く丘陵を眺めると、出来るかぎりは農業に利用してあつて、平野に設けた水田もごく細かに小さく仕切をつけてあるのが、今更ながら珍らしい。萬づに注意深い技巧の施してある日本國だと考へながら、神戸の郊外を離れた。

其後度々神戸へ行つた。行き慣れてみると、親しみも自然に加はり、美しい所にも氣付いて来て、今では自分の好きな土地の一つになつてゐる。すべて船の出でゆく土地は妙に興味のあるもので、人の心を揺るものだ。夕がたの水を渡る汽笛の聲は、星が沈む水天の間に思を飛ばし、未見未知の夢の國に憶がれを抱かしめる。さういふ感じは海を望む丘の上の家にて、殊に深い。或夜トアホテルに音楽を聴いて、その儘そこへ泊つた時、樓上の一室から月夜の神戸港を望み、翌朝早く山手を散歩し

て香の高いパルマの董を買つた事を記憶するすべて山手のかたは海の風が青葉に漉されて去來するから自然爽快の氣を人に與へて都會の住居地としては日本一だらうやゝこゝに似てゐる東京の高輪あたりより遙かに優れてゐると思ふ。

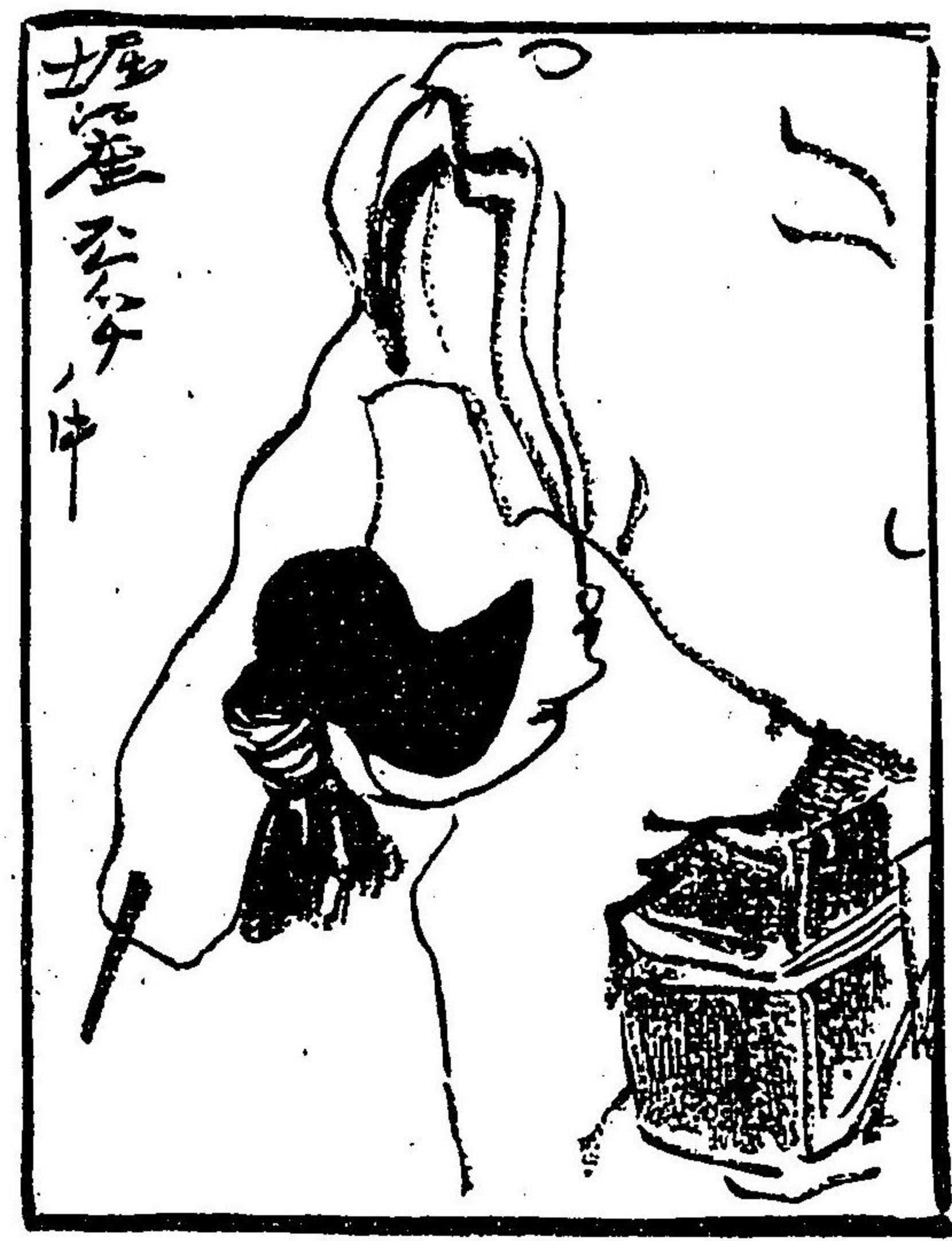
神戸はまた其近所に風景の佳い所遊樂に適する地を多く持つてゐるので有名だが陸上に別荘を建て、一つ所に立籠るよりも船を浮べて近海を乗りまはす方がもつと面白からうと考へるが、まだこの方は一般に流行しない自分の考では紅葉丸のやうな遊船に客を搭じて瀬戸内海の興を採るのは響應として最も適當とする。然しそれよりもなほ簡単な方法でも船遊が出来たらうから、今後漸々其むきの清遊を試みる人々が生じて來よう。さうなると景色の見かたまで變つて來るに違ひない。今までは陸上の一點から見た風景の一部を彼此と選んだものだが、海上から見て廣い全體の美を味ふやうになるだらう。

(336)

神戸の風景も斯の如くにして種々の方面から眺望される事になり山の影水の色朝夕の光の變化皆特殊の美を現し來つてこの港の街を愛する者を悦ばすであらう。

(337)

義つ社の鎧吹くかぜ桐竹此のれを動かさる初夏の風



繪 畫

目 次

船料理  
天王寺五重塔より  
浪花踊と住吉踊  
新町と文樂座  
大阪城  
河岸  
道頓堀  
同  
同  
心齋橋  
河岸の家  
網島  
淀川橋  
高津舞臺

中澤弘光

箱 表 見 同 厚 木 原 同 坡 木 同  
畫 紙 返 版 色 版 版 版  
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同





吉田屋座敷  
茨木屋の欄間  
御籠前文樂座  
堀江座  
千木櫻知盛  
かき舟えびす橋  
太左衛門橋  
道頓堀  
生玉神社  
天満天神龜の池  
東本願寺別院  
御堂裏  
座磨神社  
阿彌陀池  
同  
高津黒焼屋  
西鶴墓

同 同

契沖庵室  
竹天井  
天王寺四門島居前  
天王寺塔  
一心寺  
味原池  
味原池産湯  
島屋町通  
ねぢがねやのあと  
高麗橋  
たこ梅  
博物館前  
同  
松ヶ枝町の松  
楠の老樹  
河邊  
同

同 同



濱寺  
江口  
蘇村の故郷  
歌人村  
近松の墓  
須磨  
新しい土

大阪遊記  
大阪遊記

大阪  
大阪

大阪の市街  
大阪の市街  
心齋橋筋

吉井 勇  
八四

木下 李太郎  
一〇六

薄田 泣菫  
一三四  
一三七

焼栗賣  
大融寺  
木長寺  
梅屋敷の記憶(その二)  
梅屋敷の記憶(その二)  
井原四鶴の墓

大阪見物

- (一) 第一印象 一四八
- (二) 車夫 一五〇
- (三) 小賣商店 一五二
- (四) 塔と鐘の天王寺 一五三
- (五) 女樂座と道頓堀 一五六
- (六) 文明の大阪 一五八
- (七) 今後の大阪 一六二
- (八) 予と大阪 一六三

浩々歌客

- 一四八
- 一五〇
- 一五二
- 一五三
- 一五六
- 一五八
- 一六二
- 一六三

浪速の夢

- 初めの家
- 天王寺の回憶
- 桃谷の宿
- 櫻野宮の四季
- 上町の住居
- 正月ミ祭ミ節供
- 泉布觀
- 長柄の鶴滿寺
- 四條吸神社
- 濱寺公園
- 金熊寺の梅
- 平野續泉
- 御影住吉
- 星降社茗筵

須藤南翠

- 一六九
- 一七七
- 一八二
- 一九一
- 二〇四
- 二一一
- 二一八
- 二一九
- 二二三
- 二二四
- 二二六
- 二二九
- 二三二
- 二三七

有馬の湯

有馬の湯

ふるさと

堺の春  
住吉祭

與謝野晶子

- 二五九
- 二六三

泉州行脚

泉州行脚

如是法師

二七四

神戸

神戸

上田敏

三三三

製活日寫原玻木水木  
本眞色璃  
印凸  
本版刷版版版版版

金報西近大中近前長  
于村松江野田谷  
督文熊理米剛香  
太耶社吉作太滿茂二木

明治四十五年七月二十一日印刷  
明治四十五年七月二十五日發行

著作權  
所有

編輯者

東京市麹町區平河町五丁目五番地  
金尾種次郎

印刷者

東京市麹町區平河町二丁目一番地  
中村政雄

印刷所

報文社

金三門

發兌元

東京市麹町區平河町五丁目五番地

金尾

文淵堂

（電話東京三〇九七）

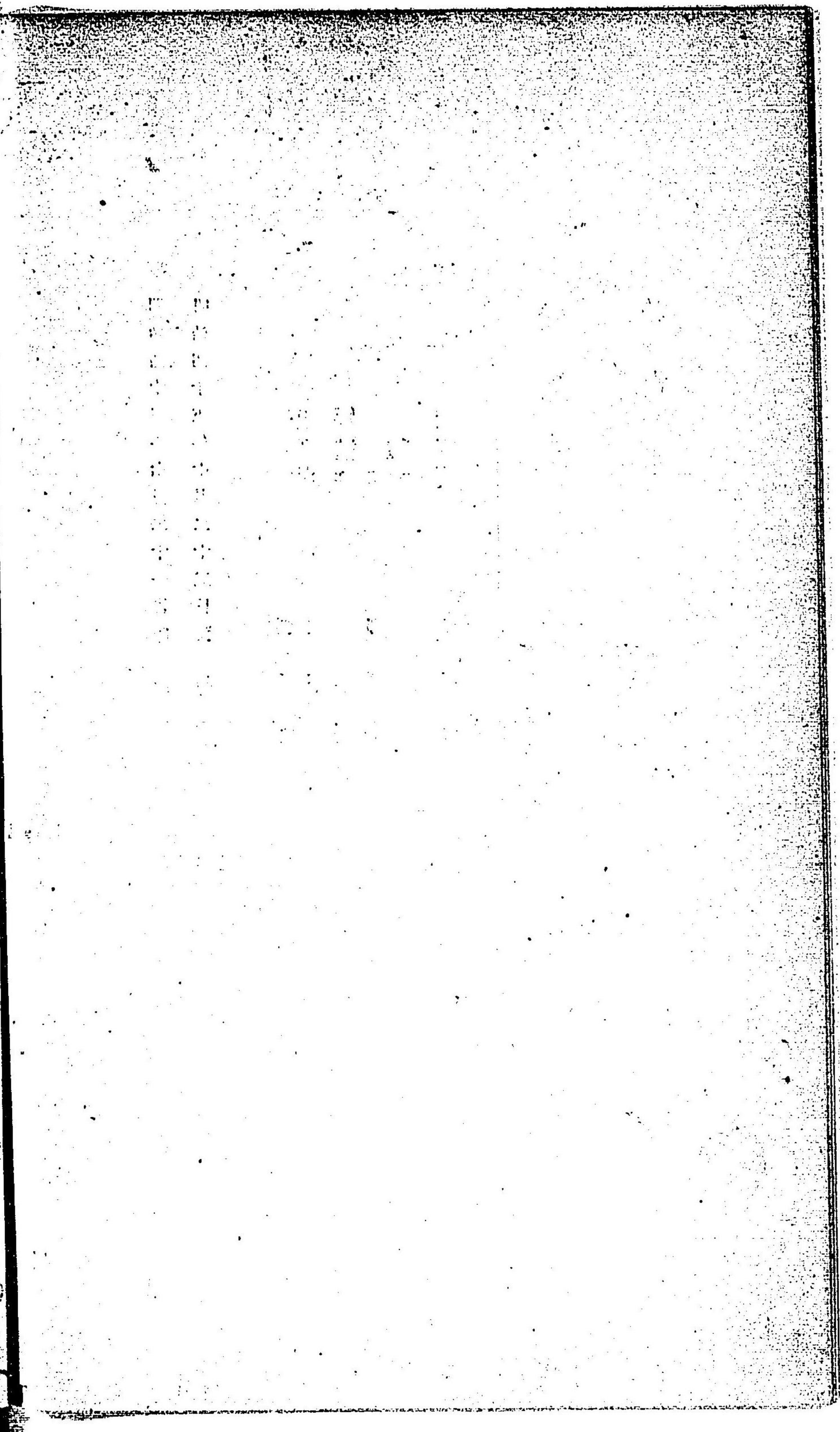
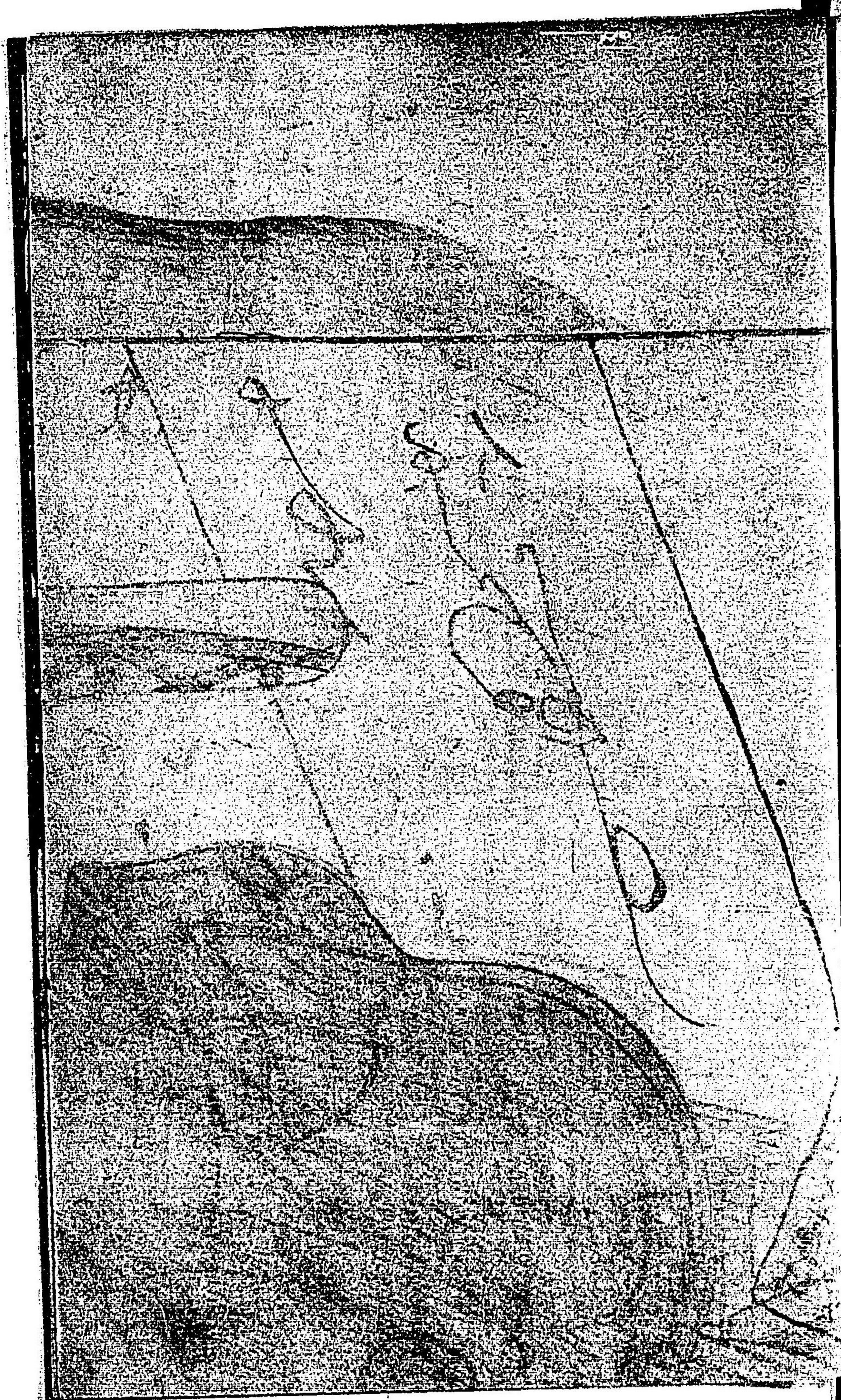
東京市神田區錦町三丁目三番地

勉強

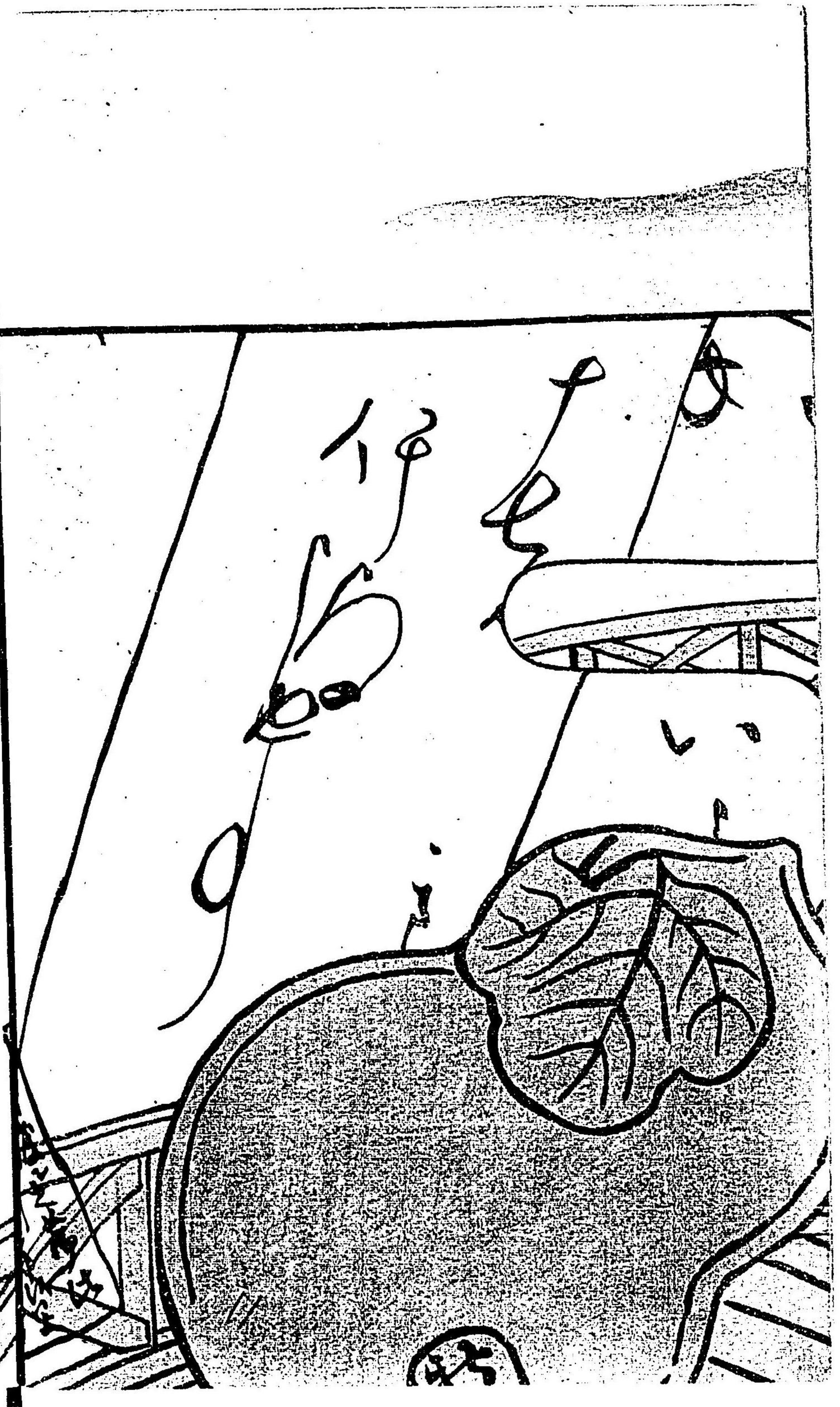
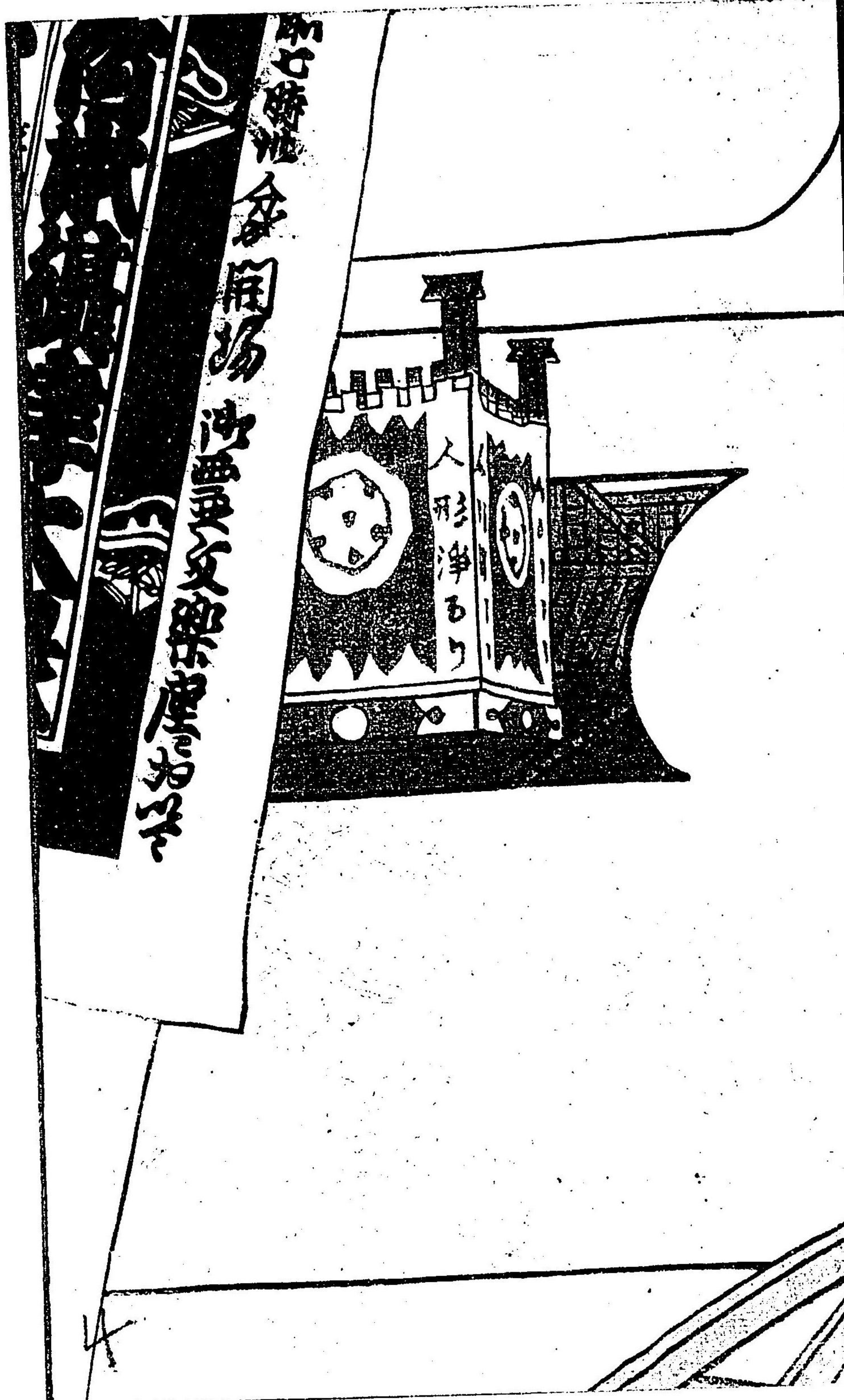
堂書店

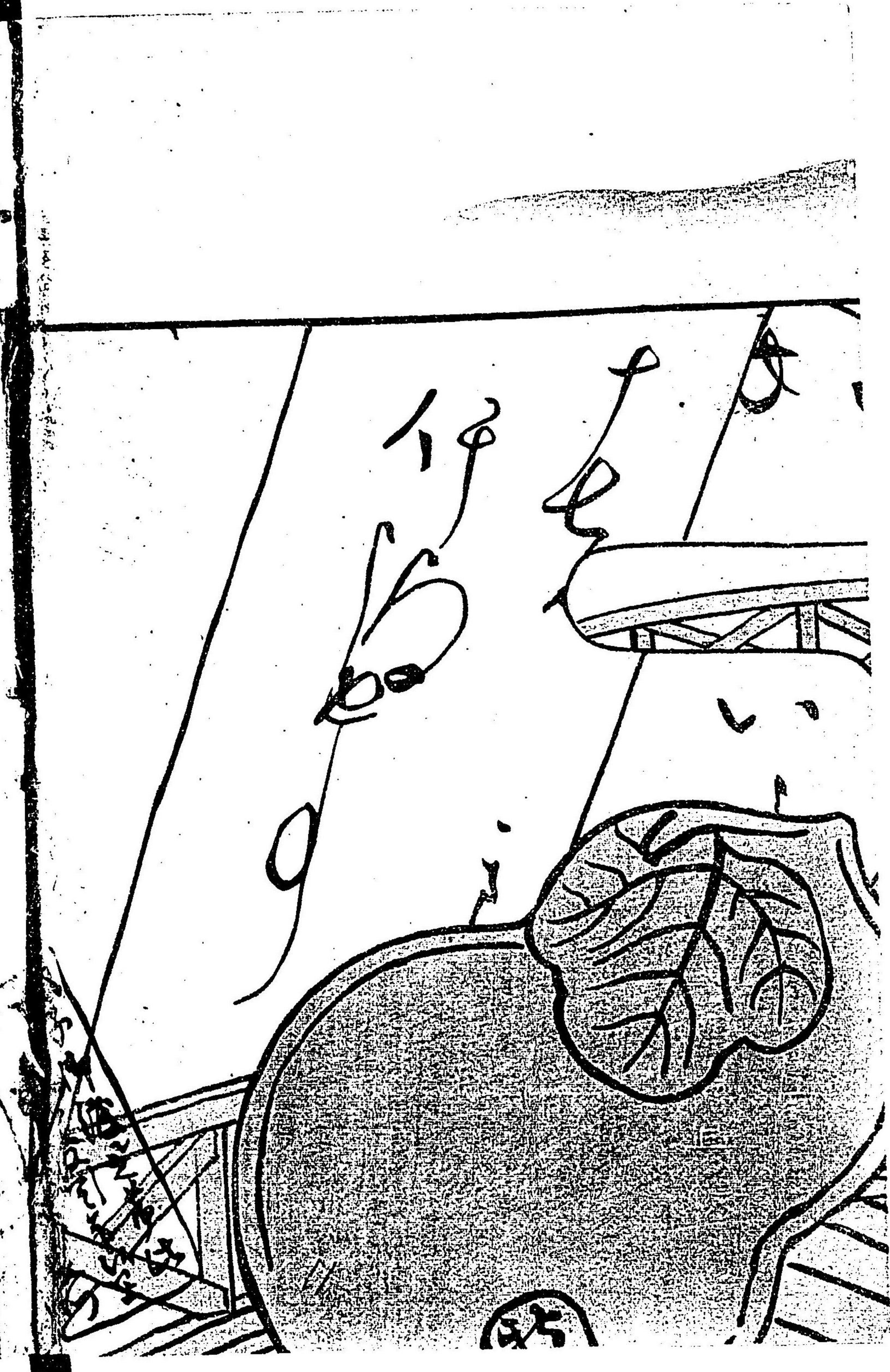
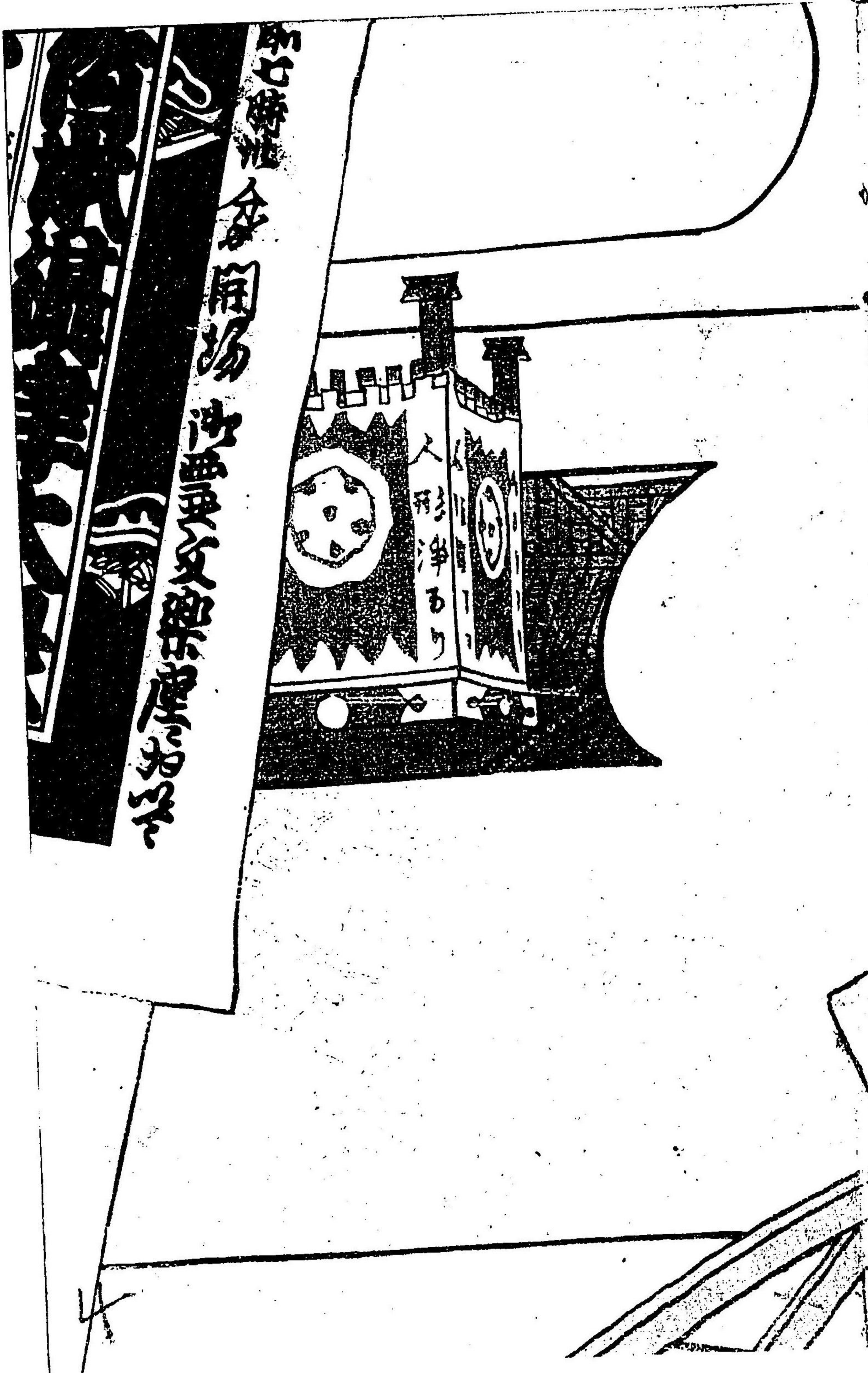
（電話東京二六〇四）

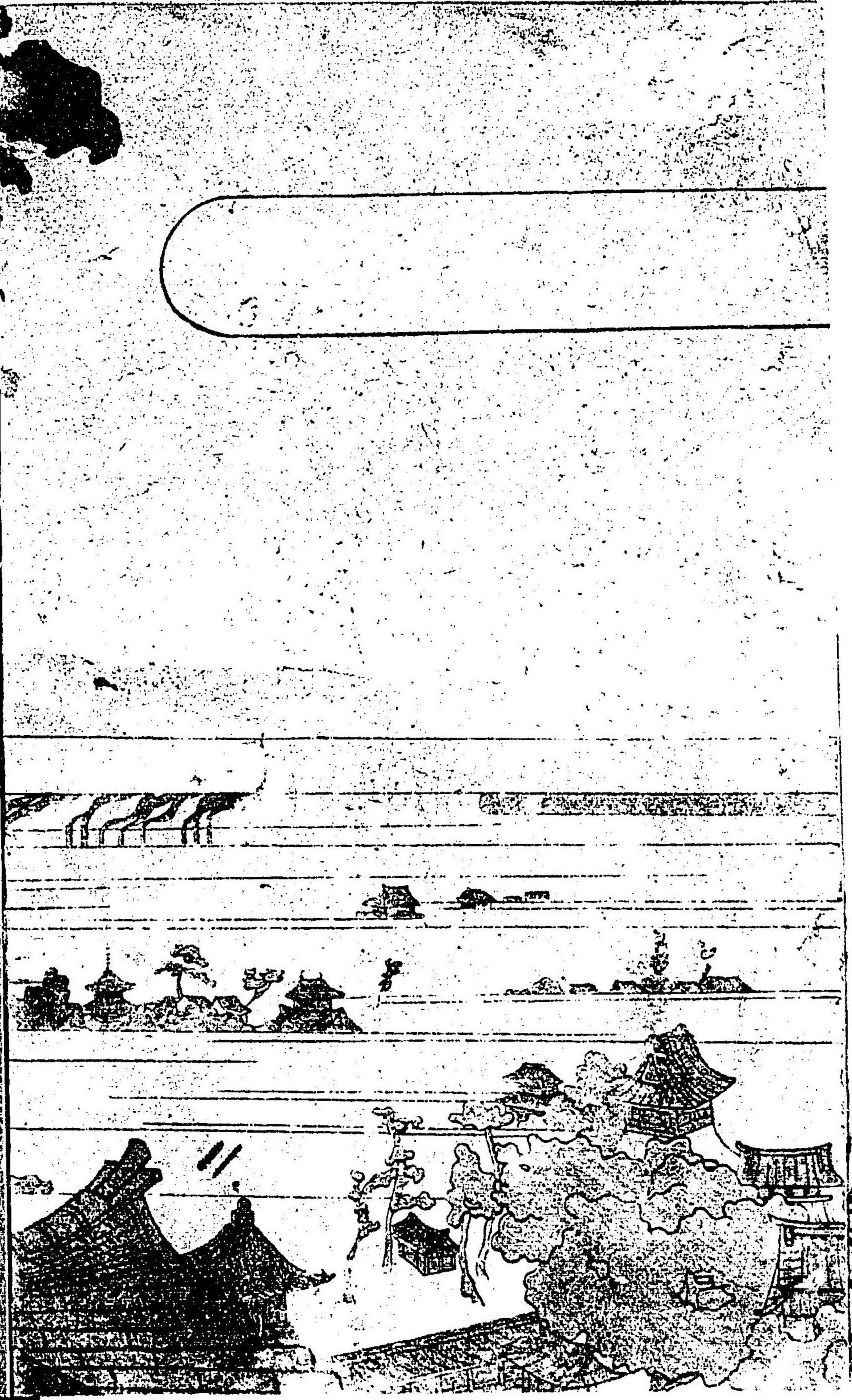
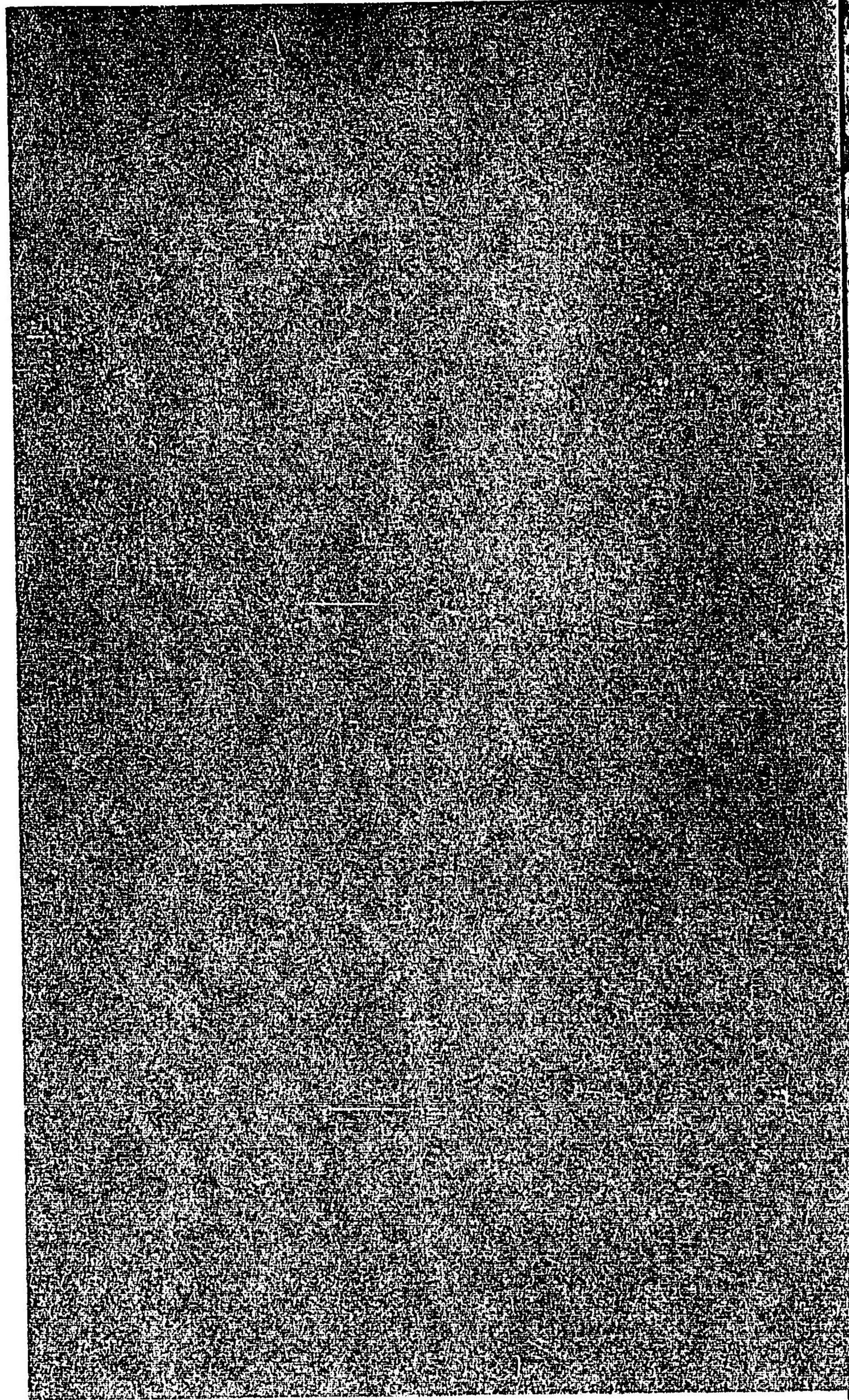
發賣元



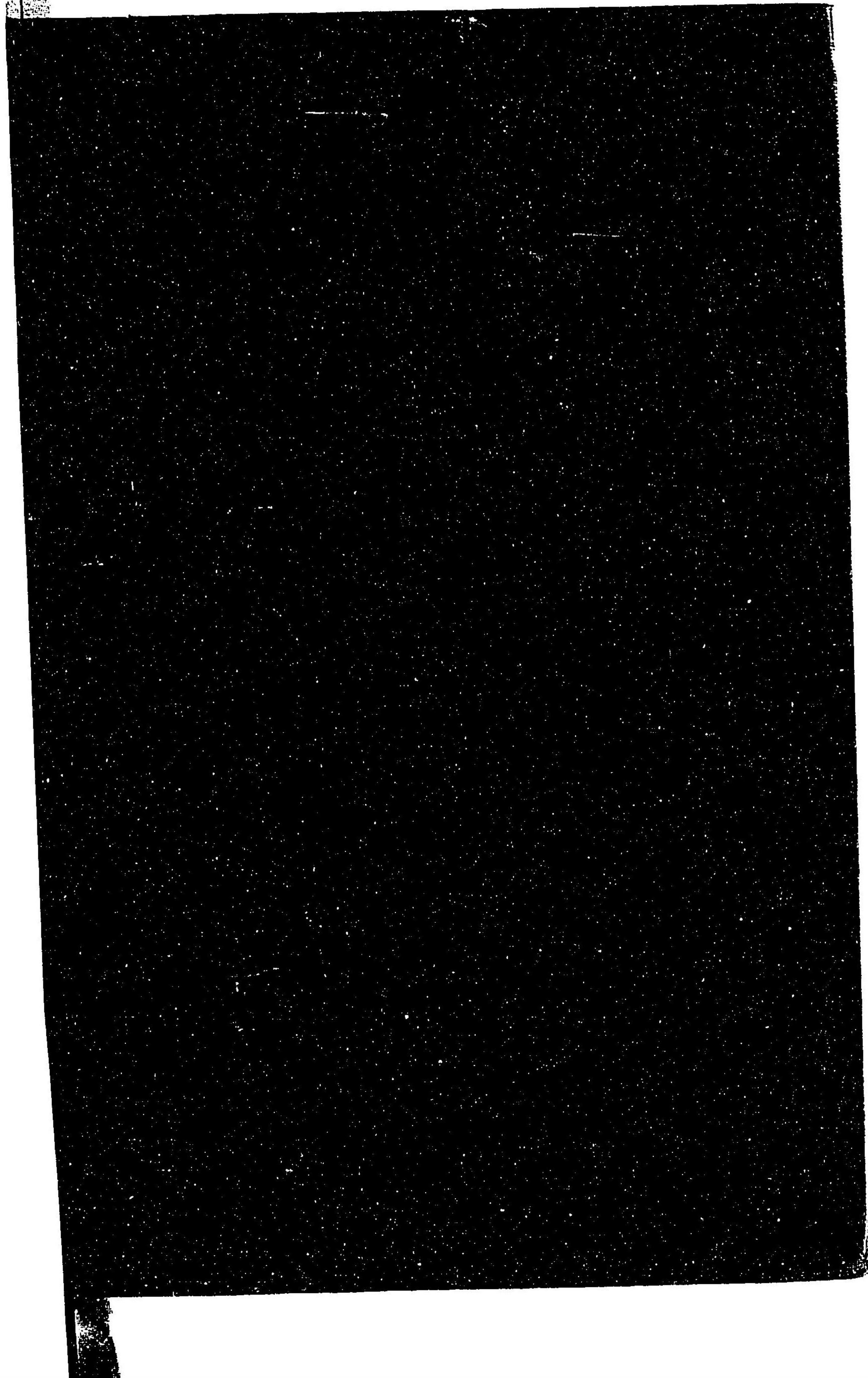








330  
27



330  
27

